『長崎国際大学論叢』 第８巻 2008年３月 219頁～225頁

研究ノート

福祉現場実習前の学生への支援のあり方に関する研究
――福祉専攻学生の大学生活と意識に関する調査から――

原 田 奈津子
（長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科）

要 旨
本研究では、福祉を学んでいる学生を対象とし、現在の学生が抱える諸問題を明らかにすると共にいかに福祉現場実習前の学生に対して支援を行っていくか検討することを目的としている。そのため、福祉を学ぶことになった要因、現在の福祉を学ぶことのやりがい、福祉職への就職意向等を軸に、ストレス、及び高齢者に対するイメージ等について質問紙調査を実施した。全体の結果から、動機づけの高い学生、または動機づけの低い学生、それぞれに応じた支援が求められていることが明らかになった。

キーワード
学生、動機づけ、ストレス、支援

１．はじめに

近年、福祉をめぐってさまざまな動きが起こっている。テレビ、新聞、雑誌などといったメディアにおいても毎日のように、福祉に関する話題や事件が取り上げられている。高齢者、障害者、児童など対象ごとに諸施策も立てられつつあるが、その中でもひとつの重要な課題が、福祉を支える人材の問題である。つまり、福祉を支える人材の量の確保、質の確保が急務となっている。しかしながら、福祉職に就く人への給与、勤務体系など待遇の厳しさや職務内容の独自性などから、福祉分野への就職を敬遠したり、福祉に従事していても離職してしまったりという傾向もみられる。そういった状況の中でも、福祉の職に就きたい、もしくは働きつづけたいという意欲を持った人もいるのも現状の一端である。

人材育成という点で、大きな役割を果たしているのが養成する機関である。大学や専門学校等多くの養成校が存在するが、多くの養成校では、福祉現場実習が取り入れられている。単に資格取得の要件ということだけではなく、福祉分野で働く上での貴重な体験になることを意図している。しかしながら、福祉現場実習においてリアリティショックをうける学生が多いといわれている。その背景には教科書で学ぶこと（介護教育）と現場とのかい離という問題、受け入れる側の体制不足などといった複合連鎖的問題が指摘できる。

また、Ciniiで「社会福祉・実習・効果」で検索したところ、21件の論文が存在する（2007年９月検索）。北川ら（1998）は、実習の満足度や達成状況などと共に、実習前教育の充実や学生の不安を解消するような体制づくりの重要性についても述べている。また、田淵ら（1997）は、実習前後の学生における施設イメージの変化について触れている。鳩間ら（2006）は、実習の効果に関する評価項目として、１年次の施設見学における援助活動が目指す目標（価値）の変化を中心に検討をしている。

すでに筆者が行った福祉系専門学校の学生を対象に行った研究では、全体の結果から、ストレスと実習満足度に関連がみられた。また、福祉を学ぶことへのやりがい、福祉職に就く意

向、利用者へのかかわりに関する満足度もストレスと関連していることが明らかになった。また、ストレスとイメージとの関連、サポート源活用についても実習に関して大きな意味を持つことがわかった。

このように実習後を中心とした研究はみられるが、専門教育が始まり間もない学生の状況とそれを支える教育や体制に関する研究は十分であるといえない。よって、本稿では、現在、福祉を学んでいる学生の状況を把握し、彼らが学生生活の中で、福祉専門職としての力量をつける際に、いかにサポートしていくか考えてみたい。また、実習前の福祉に関する意識から、実習前における段階でのモチベーションも考察していきたい。本研究におけるモチベーションとは動機付けのことを指し、福祉を学ぶことになったきっかけや福祉を学んでいることのやりがい、福祉職に就く意向などからみていきたい。

それによって、福祉職としての専門性を身に付けた質の高い人材育成のあり方に関する示唆が得られるのではないかと考える。

2．研究方法と対象

先行研究のレビューを行い、福祉を学ぶ学生として九州内のＡ大学の学生へ質問紙調査を実施した。調査対象は、老人福祉論（介護クラスは除く）の受講生であり、回収し分析に用いたのは、75人である（2006年12月）。

調査は以下の主な項目からなる。

① 食事や友人関係、部活やサークルへの参加などの現在の大学生活に関する項目

② 福祉を学ぶことになった要因、福祉を学ぶことのやりがい、福祉職への就職意向等の各自の福祉への関わりについての項目（モチベーション測定）

③ 高齢者イメージスケール（６項目）

就職先や実習先としても高齢者福祉施設が多いこともあり、今回は高齢者へのイメージについてきいた。「穏やか―怒りっぽい」「暖かい―冷たい」等の６項目について、高齢者のイメージを検証する。「穏やか―怒りっぽい」を例にみると、「とても穏やか」が１点、「やや穏やか」が２点「どちらともいえない」が３点、「やや怒りっぽい」が４点、「とても怒りっぽい」が５点となる。他の５項目についても同様の手続きをとる。よってそれらの総和を項目数で割ったものをイメージ得点として分析に使用する。点数が低いほど、イメージは肯定的、逆に高ければイメージは否定的となる。

④ パブリックヘルスリサーチセンター版ストレスチェックリスト（44項目）

３つのサブスケールからなる。

「急に息苦しくなる」「目が疲れやすい」等の一過性のストレス反応とされる特徴や慢性的な疲労を示す身体的ストレス15項目、「不安を感じる」「ゆううつで気分が落ち込む」等の心理的ストレス18項目、「毎日の暮らしの重さに圧力を感じる」「いろいろな規則が窮屈に思える」等の状況認知ストレス11項目となっている。

それぞれの項目については、「ない」（１点）、「ときどきある」（２点）、「よくある」（３点）の３件法で回答している。

⑤ 性別・住まい等のフェイス項目

⑥ 自由記述

3．結　果

⑴ 基本属性

分析に用いたのは75名であり、うち女性が29人、男性が46人となっている。

① 現在の大学生活に関する項目結果

食事について、まず朝食については、「ほとんど食べない」（40.0%）、「ほとんど毎日食べる」

(37.3%) と両極端な結果であった。昼食については「ほとんど毎日食べる」(82.7%) と多数を占める。

睡眠については、「規則的」(36.0%)、「不規則」(64.0%) であり、平均した睡眠時間は354分（約6時間）である。

喫煙については、普段タバコを吸っているかという問いに対して、「はい」(24.0%)、「いいえ」(76.0%) となった。

友人関係をきくものとして、「あなたには“親友”がいますか」という設問では、「はい」(86.7%)、「いいえ」(13.3%) という答えであった。その際、“親友”の人数をあわせて聞いたところ、平均して4.3人であった（1人から15人の幅）

“生きがい”を最も感じるのはどんなときかという質問については、「友だちといるとき」(34.3%)、「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」(32.9%) といった選択肢に答えが集中した。

住まいについては、「自宅で家族と同居」(73.0%)、「一人暮らし」(25.7%) であった。通学時間の平均は47.9分（2分から150分の幅）。

② 福祉へのかかわりに関する項目結果

「福祉を学ぶきっかけとなった最も大きな要因は何か」との問いに、最も多かったのが「福祉や介護に興味があった」(32.0%)、次に「親や先生にすすめられた」(17.3%)、「祖父母への介護の経験」「ほかにしたいことがなかった」(共に13.3%)、「資格が取れる」(10.7%)、「やりがいがありそうだった」(8.0%)、「その他」となっている。

表1　福祉を学ぶきっかけとなった最も大きな要因

回答選択肢	人数	%
「福祉や介護に興味があった」	24	32.0%
「やりがいがありそうだった」	6	8.0%
「親や先生にすすめられた」	13	17.3%
「祖父母への介護の経験」	10	13.3%
「資格が取れる」	8	10.7%
「ほかにしたいことがなかった」	10	13.3%
「その他」	4	5.4%
計	75	100.0%

「福祉を学ぶことについてやりがいを感じているかどうか」については、「非常に感じている」(12.0%)、「まあ感じている」(49.3%) と前向きな状態にあるものが約6割強、他は「あまり感じていない」(34.7%)「全く感じていない」(4.0%) となっている。

表2　福祉を学ぶことについてのやりがい

回答選択肢	人数	%
「非常に感じている」	9	12.0%
「まあ感じている」	37	49.3%
「あまり感じていない」	26	34.7%
「全く感じていない」	3	4.0%
計	75	100.0%

「今後福祉の仕事に就きたいかどうか」については、「非常にそうしたい」(18.7%)、「まあそうしたい」(46.7%) と福祉の仕事への就職を前向きに捉えている学生が約三分の二いる。残りの三分の一は「あまりそうしたくない」(25.3%) や「その他」として「まだわからない」「就き

表3　就職する際に最も重視したいこと

回答選択肢	人数	%
「収入が多い職場」	14	18.7%
「人間関係がよい職場」	31	41.3%
「自分の才能がいかせる職場」	17	22.7%
「実家に近い職場」	2	2.7%
「特に重視しているものはない」	5	6.6%
「その他」（社会の役に立つ等）	6	8.0%
計	75	100.0%

たくない」といった否定的な見解を持つ。

就職する際に最も重視したいことは、「人間関係がよい職場」(41.3%)、「自分の才能がいかせる職場」(22.7%)、「収入が多い職場」(18.7%)の順である。

⑵　尺度の内的信頼性

利用者イメージスケール、ストレスチェックリストにおけるクロンバックの信頼性係数αを求めたところ、利用者イメージスケールα＝0.7895、ストレスチェックリストについては、全体α＝0.9427となった。ストレスチェックリストのサブスケールごとでは、身体的ストレスα＝0.8673、心理的ストレスα＝0.9051、状況認知ストレスα＝0.8575となった。以上により、本調査における内的信頼性が確認された。

⑶　主な調査結果

ストレスチェックリストにおけるサブスケールの平均値及び標準偏差についてまとめたのが表４である。心理的ストレスの得点が他と比べてやや高いのが特徴である。

表４　各ストレス平均値及び標準偏差

身体的ストレス	…1.60（0.41）
心理的ストレス	…1.79（0.43）
状況認知ストレス	…1.67（0.45）

次に「福祉を学ぶことのやりがい」と各項目についての関連を探るため、相関係数を求め、表５に記した。

「福祉職に就く意向」（r＝0.468、p＜0.05）では正の相関が示された。また、「生きがい」（r＝0.342、p＜0.01）、「心理的ストレス」（r＝0.249、p＜0.05）、「高齢者イメージ」（r＝0.278、p＜0.05）、「性別」（r＝0.241、p＜0.05）とそれぞれ正の弱い相関が示された。

また、「福祉職に就く意向」との関連について前述の「福祉を学ぶことのやりがい」以外で検証したところ、「高齢者イメージ」（r＝0.343、p＜0.01）、「生きがい」（r＝0.325、p＜0.01）、「福祉を学ぶきっかけ・要因」（r＝0.346、p＜0.01）、「性別」（r＝0.251、p＜0.05）の項目で正の弱い相関がみられた（表６）。

表５　相関係数（福祉を学ぶことのやりがい関連）

	福祉を学ぶやりがい
生きがい	0.342**
福祉職に就く意向	0.468*
心理的ストレス	0.249*
高齢者イメージ	0.278*
性別	0.241*

*p＜0.05　　**p＜0.01

表６　相関係数（福祉職に就く意向関連）

	福祉職に就く意向
高齢者イメージ	0.343**
性別	0.251*
福祉を学ぶ要因	0.346**
生きがい	0.325**

*p＜0.05　　**p＜0.01

４．考　察

基本属性から明らかになったことをまず整理をしてみたい。ここ最近、大学生の食生活について、各大学で食券を配るなど、特に朝食に対する意味合いが大きく取り上げられてきた。栄養をきちんと取ることと単位履修状況との関連も話題となっている。今回の調査において、朝食については、「ほとんど食べない」(40.0%)、「ほとんど毎日食べる」(37.3%)と両極端な結果であった。ライフスタイルといってしまえばそれまでだが、朝食の摂取に関してどういう要因があるのか、さらにそれが及ぼす影響について詳しくみていく必要があると感じた。

睡眠については、「規則的」(36.0%)、「不規

則」（64.0%）であり、平均した睡眠時間は354分（約６時間）であるが、２、３時間の睡眠と10時間を越える睡眠とばらつきもあった。

食事や睡眠に大きくかかわってくる住まいの形態については、自宅生が４分の３であり、自宅生ほどやはり通学時間が長い傾向にある。ある意味、自宅生が規則正しく生活を送らざるをえない状況にあるともいえる。

健康面では、喫煙について、普段タバコを吸っているかという問いに対して、「はい」（24.0%）、「いいえ」（76.0%）となり、予測したよりは喫煙率が低いように感じた。

大学生活における友人関係の構築と維持は大きな課題である。ソーシャルスキルを学び実践する場であり、大学生活の充実度にも影響する要素である。今回、「あなたには“親友”がいますか」という設問を設けていたが、単なる“友人”ではなく、より深いかかわりとしての意味合いがある“親友”ということを意図しており、「はい」（86.7%）、「いいえ」（13.3%）という答えであった。よって、「いいえ」と答えた人でも、孤立しているわけではなく、一緒に普段かかわっている“友人”はいるが深くかかわるような“親友”と呼べるかどうかは微妙なのであろう。親友の人数についてもばらつきはあるが、最も信頼できる親友とはどこで出会ったかという設問では、「中学までに」、「大学に入ってから」、「高校のとき」といった順番になった。

“生きがい”を最も感じるのはどんなときかという質問については、「友だちといるとき」（34.3%）、「スポーツや趣味に打ち込んでいるとき」（32.9%）といった選択肢に答えが集中しており、活動的な大学生活の一端がみてとれた。

福祉へのかかわりに関する項目結果では、まず、「福祉を学ぶきっかけとなった最も大きな要因は何か」との問いに、「福祉や介護に興味があった」（32.0%）、「やりがいがありそうだった」（8.0%）という自ら進んで福祉を志した者がいる一方で、「親や先生にすすめられた」（17.3%）、「ほかにしたいことがなかった」（13.3%）という外的な動機付けやなんとなく大学生活に入っていったという層もみられる。以前、筆者が行った首都圏の福祉系専門学校生への調査では、「親や先生にすすめられた」という層はあまりみられなかったことから、地域の特性からなのか、非常に印象に残った。

また、福祉を志す理由でよく学生が口にしている「祖父母への介護の経験」についても、やはり要因のひとつとして挙がってきた。「資格が取れる」（10.7%）については、現在、福祉の資格として、介護福祉士や社会福祉士、精神保健福祉士などいくつかの資格があるが、それらの取得を目指したより学びの意識の高い学生であるといえよう。

前述のような要因で福祉系専攻に所属しているわけであるが、では現在の状況についてはどうかというと、「福祉を学ぶことについてやりがいを感じているかどうか」については、「非常に感じている」（12.0%）、「まあ感じている」（49.3%）と前向きな状態にある者が約６割強、他は「あまり感じていない」（34.7%）「全く感じていない」（4.0%）という結果になっている。今回の調査対象は介護クラスを除いた２年生がメインである。カリキュラム上、A大学では２年次になると福祉の専門科目が一気に増える。１年次に取得できる福祉に関する科目は「介護概論」や「社会福祉入門」といったいくつかの科目に絞られている。２年次の福祉施設・機関への見学実習を経て、３年次に必修である社会福祉士受験取得のための実習、４年次に選択で精神保健福祉士受験取得のための実習と実際の福祉現場を体験することから、早い段階での福祉に触れる何かしらの“しかけ”が必要であると感じた。もちろん１年次からサークル活動などでボランティアをしている学生もいるが、年々参加が減少傾向にあるということからも、見直す時期にあるように感じた。

将来、「今後福祉の仕事に就きたいかどうか」については、「非常にそうしたい」（18.7%）、「ま

あそうしたい」（46.7%）と福祉の仕事への就職を前向きに捉えている学生が約三分の二いる。残りの三分の一は「あまりそうしたくない」（25.3%）や「その他」として「まだわからない」「就きたくない」といった否定的な見解を持つ。これが実習などを経て、どういった推移をたどるのか注目していきたい。

また、就職する際に最も重視したいことは、「人間関係がよい職場」（41.3%）、「自分の才能がいかせる職場」（22.7%）、「収入が多い職場」（18.7%）の順である。３、４年次で就職活動をする頃になると、「収入」を重視する雰囲気が全体的に出てくるようだが、縦断的に今後もみていく必要があるように感じた。

次に今回の調査での大きな軸である「福祉を学ぶことのやりがい」と各項目についての関連を探るため、相関係数を求めた結果、「福祉職に就く意向」との正の相関がみられた。つまり、福祉職に就くことをあまり望んでいない人は現在の学習へのやりがいが薄いことが示唆される。これについては逆に言うと、福祉職に就こうと思っている人は現在の大学生活におけるやりがいが高いともいえる。

また、「心理的ストレス」と正の相関が弱いながらも示された。福祉を学ぶことのやりがいを感じられない人は、心理的なストレスを抱えていることも考えられる。また、高齢者へのイメージがネガティブな人も現在のやりがいが低いことが示唆された。

いかに大学生活の中で福祉を学ぶことへの動機づけしていくかが、将来への意向にもかかわることが明らかになった。

では、その「福祉職に就く意向」との関連について前述の「福祉を学ぶことのやりがい」以外で検証したところ、「高齢者イメージ」、「生きがい」、「福祉を学ぶきっかけ・要因」、「性別」の項目で正の弱い相関がみられた。福祉職を目指すことについて、福祉を学ぶことになったきっかけや現在の学生生活状況が関連していることを示している。

５．まとめ

これまで福祉に関する人材養成及び人材確保といったマンパワーについての問題が、メディアや福祉関連団体等のさまざまな場で取り上げられてきたが、そこではまず人材不足ということが大きなテーマであった。しかしながら、近年福祉分野の学校が増加し、福祉に関する資格の取得も盛んになってきている中で、単なる人材不足といった課題よりも、これからは福祉従事者としての専門性を持った人材の確保が、つまり質の確保が非常に重要な課題になっていると考えられる。そういった貴重な人材になりうる福祉専攻の大学生の現状を把握することでいろいろな示唆を得た。

今回の調査において、「福祉を学ぶきっかけとなった最も大きな要因は何か」との問いに、「福祉や介護に興味があった」や「やりがいがありそうだった」、「祖父母への介護の経験」、「資格が取れる」というような福祉に関する何らかの興味を自発的に持ち、福祉職に就くという目的意識をもって学び始めた人が約７割存在していることが明らかになった。一方、上記のような要因以外に、「親や先生にすすめられたから」「なんとなく」といったことを述べる人が約３割いるのが現状である。

また、現在、「福祉を学ぶことについてやりがいを感じているかどうか」については、「非常に感じている」、「まあ感じている」と前向きな状態にある者が約６割強、他は「あまり感じていない」、「全く感じていない」が約４割弱という結果になっている。

将来、「今後福祉の仕事に就きたいかどうか」については、「非常にそうしたい」、「まあそうしたい」と福祉の仕事への就職を前向きに捉えている学生が約３分の２いる。残りの３分の１は「あまりそうしたくない」や「その他」として「まだわからない」「就きたくない」といった否定的な見解を持つ。

福祉を学ぶことへのやりがいと将来福祉職に就く意向について、今後の福祉現場実習などを

経て、学生の中でどういった変化がみられるのか見守ると共に、いかに学生の福祉へのモチベーションをあげるかが大きな課題であると感じた。福祉を学ぶ学生には、社会福祉士等の資格取得のためもあって、福祉現場実習が多く取り入れられている。実際の現場で学ぶということが今後福祉分野で働く上での貴重な体験になることを意図している。しかしながら、福祉現場実習においてリアリティショックをうける学生が多いといわれている。その背景には教科書で学ぶこと（教育）と現場とのかい離という問題、受け入れる側、送り出す側の体制不足などといった複合連鎖的問題が指摘できる。また、実習に向けてモチベーションの高い学生へのサポート、またはモチベーションの低い学生へのサポートに関しても、それぞれに応じたサポートが求められている。

今回は限定的な調査であることから、福祉専攻学生すべてを反映するものではない。また、縦断的に推移を見ていく必要もあるのが本研究の今後の課題である。具体的には、実習後の福祉に関する意識を測ると共に、さらに初年次での学生の学びへの支援のあり方について検討を加えていきたい。これからの専門性を備えた質の高い人材を育成する上でも、学生への学びの際のサポートとして、きめ細かな対応がますます不可欠となっていくことは確かであろう。

参考文献

原田奈津子　2002「福祉現場実習における学生への支援のあり方について―福祉スーパービジョンの導入に向けて―」安田生命社会事業団　研究助成論文集　第37号　p137–144.

鳩間亜紀子・河野理恵・加藤尚子・渡邉浩文　2006「社会福祉実習の効果に関する研究―社会福祉援助技術に基づく評価項目の検討―」目白大学総合科学研究　2号　119–128　目白大学.

北川清一・久保田理雅・加藤純　1998「本学「社会福祉援助技術現場実習」（児童施設）の教育効果に関する一考察」テオロギア・ディアコニア　32号　81–97　ルーテル学院大学.

宗像恒次・川野雅資編著　1994『高齢社会のメンタルヘルス』金剛出版.

Steve Morgan 1996 *Helping Relationships in Mental Health* Chapman & Hall.

田淵　創・竹内一夫・田口豊郁・真野元四郎　1997「社会福祉実習が学生に与える効果についての研究(1)」川崎医療福祉学会誌　7(2)　369–372.

全国社会福祉協議会　1996『社会福祉施設職員の現状と採用に関する調査結果からみた傾向』.